



敬愛大学総合地域研究所シンポジウム2020

【報告】災害ボランティアを通じて学んだこと

～ 敬愛大学生のケース ～

敬愛大学地域連携センター 室長
 応急手当普及員、地域防災インストラクター

藤森 孝幸



学生の災害ボランティア活動経験

東日本大震災 (2011)	ネパール大地震(2015) 熊本地震(2016)	台風・豪雨による災害 (2019)
初期の現地支援 ・在京ネパール人留学生会 ・YMCA ・学生の安否確認 ・被災学生、外国人留学生の ケア	募金活動 	募金活動 
現地活動 	現地活動 	現地活動 



学生の災害ボランティア活動経験

宮城ボランティア

震災学習スタディツアーとして、2011年9月から毎年実施。宮城県名取市閑上地区、尚綱学院大学などと連携し、2011～2019年度に、のべ299名が参加した。



作業



慰問、傾聴



語り部訪問



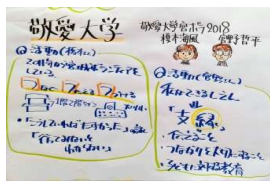
他大学との交流



学生の災害ボランティア活動経験

大学間連携災害ボランティアシンポジウム

「大学間連携災害ボランティアネットワーク」が主催するシンポジウム(於:仙台市)に、2015年度から学生を派遣。シンポジウムでの発表やポスターセッション、学生同士によるワークショップ等に参加している。





学生の災害ボランティア活動経験

大学の呼びかけによる活動

東日本大震災以降、大学として様々な被災地での学び機会提供を実施している。地域の防災イベントや福島県での学びの場など、様々な活動に学生は参加している。



農業支援



親子防災イベント



水子地蔵尊救出



学生も参加
避難所運営訓練



学生の災害ボランティア活動経験

自発的な復興支援活動

発災後、学生から自発的に募金活動や被災地での支援活動が展開された。大学として助言がする活動にも、誰からともなく手が挙がるのは、心強い。



現地支援(ネパール、佐倉市)



募金活動(熊本地震、千葉台風)



活動から得た学生たちの行動

SNS等による「間接的な語り部」

宮城での見聞を、家族や友人、周囲に発信することで、「間接的な語り部」活動が展開されている。風聞に頼らない「自らの見聞」の発信、しかも多言語による発信の効果は、極めて大きい。

卒業後の進路(就職先)にも

- ・4年間の「宮城ボランティア」参加から、「ライフラインに関する企業」をめざし、就職。
- ・こどもたちへの防災教育にめざめ、小学校教員になり、防災主任を命じられた。

などの事例が多数。



活動から得た学生たちの学び

報道や思い込みとの「差」を知る

各種報道も3月11日前に盛り上がり、直後に覚めているというのが、現実。「もう被災地は復興しただろう」という思い込みもある。現地に足を運ぶこと、そこで得た「繋がり」を保つことで、目覚める学生たち。

自分の行動が誰かの力になっているという実感

「力仕事であってもなくても、自分の行動が被災された方の力になっている」、「ありがとうと言ってもらえる」、「自分の行動に達成感がある」ということは、今の学生には、人生のうえでも貴重な機会である。



まとめとして

敬愛大学での学びは、「支縁」

敬愛大学として学生に伝えてきた学びの種 = 学生たちが得た学び

→「支縁」の大切さ

「支縁者」になれた学生たちこそ、
建学の精神「敬天愛人」の体現者である。



予告を少々

敬愛大学地域連携センター 震災満10年を考える講演会

東日本大震災から学ぶ私たちの未来

～満10年を迎える東北の被災地に私たちが学ぶべきこと

基調講演：佐藤敏郎氏

2021年2月20日（土） 13:30～16:00

オンライン併用開催予定です。